

## 北海道言語研究会 研究例会報告

2025 年度は下記の日程とプログラムで研究例会を開催した。参加者諸氏の間で活発な議論が交わされた。

・ 第 29 回研究例会

(2025 年 9 月 22 日 (月) 11:00--16:00; 会場: 室蘭工業大学・教育研究 2 号館 Q502 号室)

11:00 開会

11:05--11:55

三村竜之 (室蘭工業大学・ひと文化系領域)

「ストレスアクセントを論証するには」

声調やピッチ (高さ/高低) アクセントに比してストレス (強さ/強弱) アクセントは聞き取りが容易であると考えられる向きも少なくない。しかし実際のフィールドワークでは、例えば二音節語で主強勢の位置が特定できないという場面も稀ではない。類型論的な視点からストレスアクセントを扱った論究は数あれど、ストレスアクセントの聞き取りや本質にまつわる研究は思いの外少ない。本発表では、発表者が長年にわたり聞き取り調査を行ってきた北ゲルマン諸語を中心に具体例を引き、ストレスアクセントの本質的な側面について考察するとともに、似て非なる現象である声調やピッチアクセント、イントネーション等との関連について詳述し、ある言語における韻律現象がストレスアクセントであるか否かを論証するためにはいかなる条件や手続きが必要であるかを論じる。

13:15--14:00

廣澤慎太郎 (北海道大学大学院博士後期課程)

「アイヌ語の証拠性表現の用法について」

アイヌ語の証拠性は *ruwe ne*、*siri ne*、*hawe ne*、*humi ne* という文末形式で表される。情報源はそれぞれ、「客観的事実」「視覚」「聴覚」「それ以外の感覚」とされてきた。本研究ではアイヌ語北海道南西部方言の用例を分析し、まず、*ruwe ne* の用法に談話上の新情報を提示する機能があることを指摘し、形式名詞 *ruwe* が参照する情報源を「知識」とする仮説を提示した。また、「情報のなわ張り」理論にもとづき、先行研究で記述された *ruwe ne* の用法と新情報標示機能を同時に説明することを試みた。*siri ne*、*hawe ne*、*humi ne* については、これから行われようとしている、あるいは行うつもりでの近未来の動作を表す用法があることを示した。加えて、少なくとも胆振地方の方言では、*humi* の情報源の一つに、目視している対象の「質感」を表せる可能性があることも指摘した。

14:05 -- 14:55

山田祥子（室蘭工業大学・ひと文化系領域）

「ウイльта語の証拠性表現にみる伝聞形式の役割と起源について」

本発表では、サハリン先住民言語の一つであるウイльта語の証拠性表現のうち、間接体験 (indirect evidential) の一範疇として、伝聞を表わす形式に焦点を当てる。伝聞形式は、第二次世界大戦後に北海道に居住したウイльта語話者から採録された口頭文芸において顕著な特徴の一つで、不特定の第三者から伝え聞いた物語であるということの有標的に示す機能を果たす。発表者は、この伝聞形式を証拠性表現の体系に位置づけて考察し、伝聞の倚辞=ndA と基本伝達動詞 un-「言う」の機能面での近似性に着目した。さらに同系のツングース諸語（ナーナイ語、ウルチャ語など）との比較を行い、ウイльта語において伝聞の倚辞と基本伝達動詞（の変化形）が同源なのではないかと考えた。本発表では、この可能性を一つの仮説として提示する。

15:00 -- 15:50

塩谷 亨（室蘭工業大学・ひと文化系領域）

「ポリネシア諸語の辞書における機能語の語類表示について」

ポリネシア諸語では名詞や動詞には活用がほとんどなく、その代わり、様々な機能語（一部、語ではなく接辞も含む）が名詞や動詞の前後に付加されて、格、時制、数など、文法機能や文法範疇が表される。辞書においては、そのような多様な機能語について、例えば、冠詞、指示詞、限定詞、前置詞等の一般的な分類に加えて、その枠に入らないものは小辞（或いは接辞）として分類した上で、意味や機能を記述する場合が多い。しかしながら、例えば、限定詞と分類されるものの中には、それがどの位置に現れ、どのような要素と共起し、どのような要素と相補分布をなすのか、等の点において異なる要素が混在している。また、複数の機能語が融合したとして分析されるもの（例えば、前置詞と冠詞が融合）も存在している。このような状況においては、語類について、単に、冠詞、指示詞、前置詞、小辞等のような表示だけでは、その機能語のおおまかなイメージを把握するには便利かもしれないが、その機能語がそれぞれの言語においてどの位置に現れるのかを示すラベルとしては不十分と言える。今回は、機能語が現れる様々なポジション、及び、それが他のどの機能語と共起するか・相補分布をなすかを表せるような、分類・表記の方法について考察する。

15:25--15:35

総会（『北海道言語文化研究』編集委員より報告事項）

15:35 閉会

・ 第 30 回 研究例会

(2026 年 3 月 24 日 (火) 10:30--11:35; 会場: 室蘭工業大学・教育研究 2 号館 Q502 号室)

10:30 開会

10:35--11:30

坂本裕子 (室蘭工業大学・ひと文化系領域/国際交流センター)

郭 碧蘭 (台湾国立屏東大学)

「日本接触経験を契機とした越境志向の拡張 —日本語学習者による 3 年間の追跡調査を通じて」

近年、日本語学習者のキャリア形成は、日本留学や日本就職に収束するものとしてではなく、国際的な移動を含む多様な径路として捉えられる必要性が指摘されている。本研究は、日本でのインターンシップ経験を有する台湾人日本語学習者 1 名を対象に、3 年間の縦断的データをもとにキャリア志向の変容過程を検討することを目的とする。分析には、複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model: TEM) により分析を行い、キャリア径路を考察する。本研究では、日本接触経験が海外移動に対する認識や志向にどのような変化をもたらし、その後のキャリア形成にどのように関与していくのかに着目し、越境志向が拡張していく過程を報告する。

11:30 -- 11:35

総会 (『北海道言語文化研究』編集委員より報告事項)

11:35 閉会

## 『北海道言語文化研究』 投稿規程

1. 『北海道言語文化研究』 への投稿は、資格を問わない。
2. 投稿内容は、未発表であり、かつ投稿時に、他の学会等への発表の応募または投稿を行っていないものに限る。
3. 原稿の応募は『WORD』で読める形式のファイル (doc または docx ファイル)と印刷時の体裁確認のための PDF ファイルを提出する。  
宛先:hlcjournal@gmail.com
5. 原稿の書式は、スタイルシートに準拠させる。  
<http://u.muroran-it.ac.jp/hlc/style/>を参照。
5. 本研究会による電子化による公開を、著者が本研究会誌に投稿した時点で許諾したものとする。<http://u.muroran-it.ac.jp/hlc/journal.html>
6. 締切は各年度の 11 月 30 日 23:59 (JST)とする。
7. 投稿された論文については、2 名の匿名査読者によって査読を行う。適切な査読者の手配ができない場合は、投稿が受理されないことがある。
8. 著者による校正は原則として初校のみとする。訂正は誤植に限るものとし、内容の変更は認めない。
9. 稿料は払わない。

(2021 年 3 月 31 日改定)

## スタイルシート

- (1)使用言語:日本語もしくは英語。
- (2)原稿:『WORD』で読める形式のファイル (doc または docx ファイル )と印刷時の体裁確認のための PDF ファイルを提出する。宛先: HLCJournal@gmail.com スタイルシートのテンプレートおよびPDF化用のフリーソフトに関しては、本研究会の WEB ページを参照。(URL: <http://u.muroran-it.ac.jp/hlc/style/>)
- (3)余白(マージン ):上端 30mm 下端 25mm 左端 25mm 右端 25mm。
- (4)行数:37 行。ただし余白を遵守すれば、多少の増減は許容される。
- (5)字数:全角 39 文字または半角 78 文字。ただし余白を遵守すれば、多少の増減は許容される。
- (6)フォント:和文は MS 明朝、MS P 明朝、英文は Times New Roman のみを認める。特殊文字を使用する際には、unicode を用いることとする。
- (7)ポイント数および書体 :
- |        |           |                  |      |
|--------|-----------|------------------|------|
| 題名:    | 18 ポイント   | 太字               | 中央寄せ |
| 氏名:    | 14 ポイント   | 太字               | 中央寄せ |
| 要旨:    | 9 ポイント    | 「要旨」という文字のみ太字    |      |
| キーワード: | 9 ポイント    | 「キーワード」という文字のみ太字 |      |
| 本文:    | 10.5 ポイント |                  |      |
| セクション: | 10.5 ポイント | セクション番号と題は太字     |      |
| 謝辞:    | 9 ポイント    | 「謝辞」という文字のみ太字    |      |
| 注:     | 9 ポイント    | 「注」という文字のみ太字     |      |
| 参考文献:  | 9 ポイント    | 「参考文献」という文字のみ太字  |      |
- (8)タイトルおよび氏名:和文と欧文の2種類で書く。本文と同じ言語を先にする。和文の姓と名の間には全角の空白を 1 つ入れる。欧文の氏名は姓をすべて大文字にする (例:John BINTLET)。和文と欧文それぞれの間に 1 行の空白を入れる。
- (9)ページ数:原則として図表を含め、20 ページ以内とする。
- (10)要旨:日本語でも英語でも可。場所はタイトルの下に 1 行空白を入れた後。分量は日本語の場合 400 字以内、英語の場合は 200 語以内。左右のインデントは全角 2 文字(半角 4 文字)、両端揃えにする。
- (11)キーワード:5 つ程度のキーワードを要旨の下に 1 行あけて書く。左右のインデントは全角 2 文字(半角 4 文字)。
- (12)セクション (節):セクションの番号は 1 から始める。セクションおよびサブセクションの番号の形式は問わないが、一貫した書き方になっていること。
- (13)段落:両端揃えにすること。段落の最初の文字の下げ方等の形式は問わないが一貫した書き

方になっていること。

(14)注:通し番号をつけて脚注もしくは後注とする。通し番号の形式に指定はないが、一貫していることと、注の番号が行頭に来ないようにすること。ただし過去における研究発表情報等はタイトルの後ろに\*(半角アスタリスク)を付加し、注の先頭で言及する。

(15)参考文献:文献は本文の後ろ、後注がある場合には注の後ろに付加する。形式は問わないが、一貫した書き方になっていること。

(16)執筆者紹介:①氏名、②所属機関・部署、③メールアドレス、④ URL、⑤電話番号等を論文末に付加する。①は必須。②以降は任意で、その他の事項も付け加えることができる。現在の所属機関がない場合には、元～でも可。

(2021年3月31日改定)







Note:

The headers are set differently for even-numbered and odd-numbered pages.

When downloading and using the template, please leave one of the pre-entered characters and type over it. By doing so, your text will follow the original formatting. If you delete all the existing characters, the formatting may change, so please be careful.

北海道言語研究会 <https://u.muroran-it.ac.jp/hlc/>

本研究会は談論風発のくだけた雰囲気が集まりで、言語に関するあらゆる分野に興味のある方に開かれています。皆様のご参加、ご発表、ご投稿を心よりお待ちしております。

### 『北海道言語文化研究』への投稿について

研究論文の投稿をご希望の方は、本研究会WEBページの「スタイルシート」で投稿規定をご覧になり、スタイルシートに則った原稿を、[HLCJournal@gmail.com](mailto:HLCJournal@gmail.com)までお送りください。締め切りは11月30日です。原稿受領後、査読を実施し、その結果に基づいて編集委員会が掲載の可否を決定します。

### 研究発表について

本研究会では研究例会を3月と9月に開催しています。研究発表をご希望の方は、下記宛に発表の題目と要旨をemailで[hokkaidolinguisticcircle@gmail.com](mailto:hokkaidolinguisticcircle@gmail.com)までお送りください。持ち時間は発表30分、質疑10分です。発表要旨は『北海道言語文化研究』の研究例会報告に掲載いたします。開催日時に関しては、受付後、後日メールや本研究会WEBページでお知らせする予定です。

---

## 北海道言語文化研究 第24号

2026年3月31日発行

発行者：北海道言語研究会

投稿宛先：[HLCJournal@gmail.com](mailto:HLCJournal@gmail.com)

連絡宛先：[hokkaidolinguisticcircle@gmail.com](mailto:hokkaidolinguisticcircle@gmail.com)

〒050-8585

北海道室蘭市水元町27-1

ひと文化系領域

北海道言語研究会窓口

# Journal of Language and Culture of Hokkaido

No. 24

2026

---

## Articles

- Harry Potter and the Maturity of Language: Lexical and Syntactic Complexity Across the Series** Robert J. ASHCROFT 1
- Verbs for “to wear / to put on” in Hawaiian** Toru SHIONOYA 15
- Terms for Berries in the Uilta (Orok) Language: A Study Based on Some Glossaries and Dictionaries** Yoshiko YAMADA 29
- Horses and Water: Increasing the use of peer-generated Keyword Method sentences** Scott Nigel SUSTENANCE 53
- Shaping Japanese Students’ Perceptions of the English-Speaking World: the influence of contingent knowledge** John Guy PERREM and Brian Nollaig GAYNOR 73
- Student Experiences of Communication, Leadership and Presentation: A Qualitative Study** John Guy Perrem and Corey Reed 89
- Vocabulary Learning Support through Visualized Lexical Networks: A Service Design for Developing Paraphrasing Skills** Masatsugu ONO and Toshioki SOGA 103

**The Hokkaido Linguistic Circle**

# 北海道言語文化研究

第24号

2026年

---

## 論文

- Harry Potter and the Maturity of Language: Lexical and Syntactic Complexity Across the Series**  
Robert J. ASHCROFT 1
- ハワイ語における着用動詞について 塩谷 亨 15
- ウイルトタ語におけるベリー類の名称—語彙集・辞典にもとづく—考察—  
山田 祥子 29
- Horses and Water: Increasing the use of peer-generated Keyword Method sentences**  
Scott Nigel SUSTENANCE 53
- Shaping Japanese Students' Perceptions of the English-Speaking World: the influence of contingent knowledge**  
John Guy PERREM and Brian Nollaig GAYNOR 73
- Student Experiences of Communication, Leadership and Presentation: A Qualitative Study**  
John Guy PERREM and Corey REED 89
- 語彙ネットワーク可視化を用いた語彙学習支援の試み—パラフレーズ能力育成に向けたサービス設計—  
小野 真嗣、曾我 聡起 103